

2月13日（火）その133 歴史は勝者の記録 — 南山国 —

日曜日が「建国記念の日」だったので3連休でした。研究員の皆さんは「研究のまとめ」が大詰めですが、休めたかな？

さて私は来週、高嶺中で生徒たちに60分の講話をすることになっていきます。「夢実現講演会」という取組の一環のようです。高嶺中の教頭先生から写真もたくさん提供していただきましたから、それらも取り込んで、60分の講話のスライドやレジュメを、先週作成しました。

この連休中、「南山国」について書かれている本を再読しました。「琉球王国」（高良倉吉）、「琉球歴史の謎とロマン」（亀島靖）、「察度王・南山と北山」（与並岳生）などです。高嶺中のすぐそばには約800年前・三山時代の南山城跡があり、校歌や学校の取組に「南山」がよく登場するからです。

亀島靖の本に「歴史は勝者の記録」という言葉がありました。勝った側は自分の行為を正当化し、負けた側を悪役に仕立て上げるのです。時には歴史の記録から抹殺することもあります。琉球国王・第二尚氏の金丸はクーデターで政権を握りました。国の歴史書に、『国王が亡くなって、その息子の資質を疑って周りの人々が殺害し、多くの実力者から推挙されて金丸が王になった』という意味のことを、しゃあしゃあと書かせています。

第一尚氏の尚巴志も同じだ。中山国を滅ぼして中山王を乗っ取った尚巴志は、北山国、そして南山国を滅ぼして三山を統一する。彼も国の歴史書に北山や南山の最後の王を悪者に仕立て上げ、殺害を正当化しています。

南山国の最後の王「他魯毎」（たるみー）は、こんこんと湧き出る南山の命綱ともいえる水源・嘉手志川と尚巴志の持つ金の屏風を取り替え、領民の恨みを持った愚かな王だとされています。だから尚巴志が兵を率いて南山に乗り込んだとき、南山の百姓たちは躍り上がってこれを歓迎したと、記録されています。北山の最後の王「攀安知（はんあんち）」も同じような演出で民のことを考えない愚かな王であったと脚色されています。

多くの歴史学者達が、これらの話は歴史書を作った尚巴志側の作り話であると言っています。私もそう思います。

南山国の歴史を詳しく高嶺中の子ども達に語るつもりはありません。ただ「歴史は勝者の記録だから、勝った方の都合がいいように書かれている。南山王「他魯毎」は、嘉手志川と金の屏風を交換するような愚かなことはしていないはずだ」と、話すつもりです。

100年以上続いた南山国ですが、その実態がよくわかっていないようです。勝者中山王によって歴史から消し去られたこともあるのですが、南山国自体も内紛が絶えず、島尻大里（糸満市高嶺・南山城）と島添大里（南城市大里・大里城）で権力争いをしていたようです。

八重瀬（えーじ）グスクの按司も絡んで、親戚同士で骨肉の王位争いをやっていたような記録が残っているようです。また古い朝鮮の歴史書に、南山国王が朝鮮に亡命してきたことや、中山国王がその引き渡しを要求していることなどが書かれているようで、ちょっと「意味プープー」ですね。（笑）

「勝てば官軍、負ければ賊軍」という言葉があります。大河ドラマ「西郷（せご）どん」の主役、西郷隆盛の写真が一枚も残っていないのは、西南の役で敗れたために、明治政府の関係者によって消し去られたのでしょね。

2月14日（水）その134 旧正月の思い出 ー豚を殺すー

寒い日が続いています。ムーチーを過ぎた頃に「ムーチービーサ」（ムーチーの頃の寒波）がやってきました。それがずっと続いて、とうとう「ショークッチビーサ」（旧正月の頃の寒波）にくっついてしまいました。（笑）

皆さんが子どもの頃の正月の思い出は、どのようなことでしょうか。昭和60年前後が、「子ども」でしたか？私が子どもだった昭和30年代後半は、今とはガラリと異なる風景でした。アメリカ世（ゆー）で、まだ「戦後」を引きずっている時代でした。旧正月が正月で、新正月は「大和正月」（ヤマトウショークッチ）と呼んでいた。今日はノスタルジアなお話です。

あの頃まで渡名喜島では家畜の飼育が盛んで、どの家にも石造りの豚小屋（ウーフル）があり、豚を飼育していました。私の家でも豚や山羊を飼っていて、山羊の草を刈りにいくのが毎日の日課でした。山羊は、青々として柔らかい草は大好きでしたが、今頃畑によく生える「るりはこべ」や「うまごやし」などは、最初は食べるけど、段々にりてきて（あきてきて）、食べなくなります。正月は畑や山に行かないので、旧正月前には数日分の山羊の餌を「刈り貯め」しなければならないので、忙しかった。

また白い砂を海岸から運んできて、道路や屋敷の周りにまく風習があった。白砂を砂浜から運んでくるのは子ども達の仕事だった。渡名喜島は道路が舗装されてなく砂道で、庭も砂地であった。運んできた砂をどこか一角に盛り上げておき、全ての仕事が終わった大晦日の夕方頃にきれいに掃除した後で道や庭にまくのだ。薄暗くなった道路が、白砂でぼーっと光るような感じがした。とても清新で身の引き締まる思いがして、「正月だ！」と感じた。

それから大晦日にはどこの家でも豚をつぶした。手頃な子豚を一頭、出荷せずに「正月用」として飼育していた。そして大晦日の朝になると、どこの家からも豚の悲鳴が聞こえてきた。豚を殺すのである。（ウークルシー）中学生くらいになると手伝わされた。前の晩から口や足を縛り上げられ横たわっている豚の心臓（動脈だったかな？）を、包丁で突き刺して失血死させるのである。豚は死にものぐるいで暴れるので、数人の男たちで押さえつける。家畜は肉になる運命だから、かわいそうとは思わなかった。ほとぼしり出る血も器に受けて取っておく。漁で使う縄（鮫縄・サバナー）を染めるのだ。お湯をかけ毛を抜きバーナーなどの火で焼ききってから解体する。ご承知のように内蔵も「中味」として料理するので、海に持って行ってきれいに下ごしらえをした。豚は鳴き声以外みんな食べられる。（笑）

まだ冷蔵庫がなかった頃には、豚肉を短冊状に切って塩漬けにして樽などで保存した。（スーチカー・清明祭の頃まで食べたような気がする）あぶらみからラードも作った。大晦日の夜から肉汁やてびち料理など豚肉三昧……年に一度のご馳走だった。この習慣はかつては沖縄じゅうにあったはずだが都市部では早く消えて、離島や田舎などで50年前頃までは残っていた。

家畜は食べ物である。今の子ども達は（大人も？）魚をさばいたり、生きた動物が肉になる過程を見たことがない子が多いだろう。逆にそのような体験をすることが、無駄な殺生はしないことや生命の尊重につながると思う。

16日（金）が旧正月だ。今では糸満市や一部の漁村でのみ祝う風物詩となったが、漁船の大漁旗などを見ると、ふるさとを思い出す。

2月15日（木）その135 島教連の活動報告会 – 自己研鑽こそ力–

ショーグッチビーサ（旧正月頃の寒波）で、大変寒い日が続いています。今年はムーチービーサ（ムーチーの頃の寒波）からずっと引き続き寒い日が続いていますね。二つの寒波がくっついてしまったような寒さです。（笑）

さてそんな中、13日（火）に「島尻地区教育団体連絡協議会」（島教連）の活動報告会が、南部総合福祉センターホールで開催されました。授業を終えて約70人余の先生方が駆けつけてくださり、大変ありがとうございました。島教連の比嘉良雄会長（大里南小）、榮野元康一副会長（とよみ小）、桑江常勝副会長（知念中）のリーダーシップのもと、26の幼小中の研究団体が加盟し、連携及び協力を密にして「島尻地区の子ども達のために」頑張ってもらっています。

このような研究団体の連絡協議会は、他の地区には例がないのではないかと考えています。「島尻は一つ」という言葉が昔からありますが、まさに「島尻の子ども達のために」と、地区内の多くの研究団体が切磋琢磨している感があります。さらに多くの先生方を巻き込んで、島尻地区の全職員がいずれかの研究会に属しているという風になっただけならいいなと思います。

色々な研修の形態がありますが、私は「自主研修こそが最も力がつく研修」であると考えています。子ども達に「主体的・対話的で深い学び」を通して指導をするわけですから、教員自らも範を示すことになると思います。

私は中学の数学の教員でした。私の「主体的・対話的で深い学び」の例を一つだけお話ししましょう。新採用で西表・船浮中に勤めはじめた頃、「球の体積は、なぜ（3分の4） $\cdot \pi r^3$ になるのか。それを中学生に分かりやすく説明してやりたいと思っていました。円の方程式と積分を使えば簡単に証明できますが、それだと高校生の学習になってしまいます。「中学生の知識で証明できないか」と、ずっと考え続けていました。ああでもない、こうでもない何度も試行錯誤を続け、1か月くらいかかってようやく積分を使わずに証明することができました。しかしそれは区分求積法という積分の考え方で、「中学生には、感覚的に納得させるしかないな」と思いました。

自分の興味・関心に基づいた研究だったから、どこまでも考え続けたのだと思います。例え結果は出せなくても壁にぶち当たっても、「ああでもない、こうでもない」と深く考え続けることに意味があるものと考えます。

さて、小学校特別活動研究会の幸地翠先生、中学校国語研究会の外間牧乃先生、実践発表を紹介してくださって大変ありがとうございました。一番重要なのは、指導案も書かずに行う「日々の授業」ですね。一日一日、その積み重ねが子ども達の力を高めていくことにつながります。

でも要請に応じて、このような研究論文的なものを作ることも、大きな力であると考えます。今回の発表は、これまでの実践をまとめ、振り返るよい機会でもあったものと思いますし、まとめることを通して「教員としての力量」が、間違いなくワンランクアップしたものと考えます。

多くの先生方がぜひこのような機会を活用して、自身の教師としての力量を高めていただくことを希望しています。そして結果的に「島尻地区の子ども達のために」素晴らしい授業実践ができるよう頑張りたいと思います。